

浜田繁治「雁金山の平和塔について」

佐々木 孝文

【解説】

浜田繁治（大正8年～平成26年）氏は、平成7年に結成された「久松山を考える会」の初代会長であり、現行の「史跡鳥取城跡附太閤ヶ平保存整備基本計画」の策定の際、市民の意見を代表する立場で、委員として参画された人物である（当時、筆者は鳥取市歴史博物館の学芸員と兼務し、計画策定を直接担当していた）。吉川経家の顕彰など、数多くの社会活動に参加され、調査研究における城郭研究家の吉田浅雄氏と並んで、長きにわたって鳥取城跡の保存・活用の機運の醸成に尽力されてきた方である。

今回紹介するのは、平成7年頃に、浜田氏から鳥取市教育委員会文化課にあてて送付された文書である。ワードプロセッサ縦書きの本文に、「平和塔建立趣意書」の複写を添付されたものであり、全体をゼロックスで複写し、鉛筆で「文化課様」と記入されている。おそらくかなりの数を配布されたものと思われるが、どのような範囲で配布されたのかは現時点では不明である。

内容は、鳥取城跡の史跡指定に一定の影響を与えたと考えられる、「雁金山の平和祈念塔」の建立経緯に関わるものである。昭和28年10月21日付で鳥取市教育委員会が市長に提出した「平和塔建立のため久松山一部借用願について（意見）」が鳥取市教育委員会に残されているが、それは「平和塔の建立の意図は適当」としながら、「久松山頂に建立することについて」は

1. 文部省として鳥取城跡を史跡指定する意図があること
2. 山頂への平和塔は史跡としての意義を失

わせること

3. 景観が悪化すること

を理由に反対し、適地として

- 1 吉川経家公墓地に近接した墓地公園
- 2 源太夫山頂
- 3 大隣寺裏山、興禅寺裏山

を例示している。結局これらのいずれでもない現在地に、平和祈念塔は建設されている（資料の全文と内容の補足については『鳥取城調査研究年報』第7号（2014）所載の拙稿（「資料紹介・史跡指定前夜」）のほか『新鳥取県史 資料編現代編』の解題を参照していただきたい）。

本文は縦書きで書かれ、浜田氏の鳥取城跡・鳥取市への思いを起点に、浜田氏の日から見た「平和祈念塔設立の経過」が端的に記されている。今回、個々の記載事項の内容について一次史料で確認することはできなかったが、上にあげた史料をはじめ前後の一次史料と突合してみても、大まかな流れについては正確に抑えておられたことがわかる。

ただし、事業の発案者を本慈院の山根啓念師としている点について現住職の山根慈弘師の記憶（啓念師は事業の発案者ではなく、鳥取の仏教界全体の機運の盛り上がりの中で一定の役割を果たした）との食い違いがあるなど、同時代の文章ではなく、30年以上経過した後、個人の記憶に頼って書かれたものであることは留保しておく必要がある。

一方、「設計者は岸田日出刀氏ではなく当時市に奉職していた蓮佛亨氏である」という点については、筆者はかつて蓮佛亨氏ご本人から偶然に同様の話を伺ったことがある。蓮佛氏が

山本宣治氏（明治22年～昭和4年・生物学者で、産児制限運動を通じて左翼政治家となる。昭和3年より衆議院議員となるが昭和4年に右翼青年により暗殺）の顕彰会である「宇治山宣会」の会員であったことから、展覧会の調査で宇治「花やしき」に資料調査にうかがった際に偶然お目にかかり、鳥取大火の直後、復興局で技師として働かれた事、その時に平和祈念塔を設計されたことをお聞きした。ちなみにこの時に、浜田氏が「山宣の三男」であるともあわせてご教示いただいたのだが、そもそもお二人はこの平和祈念塔設置運動の時点からの知己であった。資料本文中にあるように、蓮佛氏は塔の設計後、市を退職して独立し京都で建築事務所を営まれた。ちなみに、趣意書には塔のスケッチが付されていたという山根慈弘師のご記憶から推測するに、岸田氏のエスキスあるいはラフスケッチが存在し、それを下敷きに設計された可能性もあるが、その点は未確認である。

いずれにせよ、鳥取城跡の史跡指定直前に行われた大事業であり、後日とはいえその経緯を浜田氏がまとめておられたことの意味は大きい。一次史料による確認は今後必要だと思われるが、起点となる資料として今号に掲載する。

戦時中の防空壕や防空監視哨の設置・松根油採取にはじまり、久松ロープウェイの設置や昭和40年代の山上ノ丸の公園整備、北側斜面での造林・植林など、近現代の久松山・鳥取城跡については詳細な経緯の不明な点が多く、平和祈念塔に限らず、今後の更なる調査・解明が必要であろう。

なお、現在も平和祈念塔は久松山から尾根でつながる雁金山に聳え、中心市街地を見守っている。昭和27年の鳥取大火で廃絶した愛宕神社跡、あるいは円護寺トンネル手前の鳥取市埋蔵文化財センター付近から平和塔にアプローチすることができ、基壇部に埋め込まれた各地の市

長の銘板（各地の産石を使用している）を見ることができる（令和2年2月現在）。

翻刻にあたっては極力原資料準じたが、一ヶ所、個人の住所が記載されている箇所を「●」で表記した。

本資料の掲載については、浜田繁治氏のご子息・浜田浩之氏に快くご許可をいただいた。ご協力いただいた久松山を考える会の皆様とあわせて、この場を借りて感謝申し上げます。

〔資料本文〕

(書き込み「文化課様」)

雁金山の平和塔について

浜田 繁治

一、はじめに

久松連山の一峰、雁金山（一三七・五メートル）の頂上に、平和塔がある。

十三段の尖塔が白く輝き、夜ともなれば照明がついて、夜空にくつきりと浮かび上がる。これを見る人々は、「あそこに何かあるな」と思うであろうが、それ以上の関心を持つ人は少ないようである。

この雁金山は、四百年前の鳥取城攻防の古戦場であり、この塔は鳥取の人々が、戦いやその後の災害で命を失った人々を供養し、平和と安泰を祈った結晶なのである。

天正九年六月から始まった、織田信長軍の先鋒羽柴秀吉と、毛利輝元軍の第一線、鳥取城の守将吉川経家との戦いは、秀吉の徹底した兵糧攻めにより、十月にはいると城に籠る二千の兵と民は、まさに餓死寸前の状況に陥った。城将吉川経家はついに意を決して、秀吉の開場の求めに応じ、十月二十五日、兵と民の声明を救って壮烈な自刃をした。その最期は武人として歴史に残っている。

この経家の事跡を形に見えるものにして世の中に検証しようという動きが鳥取に起こり、経家の子孫や縁者、鳥取、岩国の市民や会社の協力により、平成五年十月二十五日、経家公の銅像が、お堀端の鳥取武道館の構内に鳥取城を守る雄々しい姿で建立された。

私、浜田繁治は、久松山の直下西町三丁目に生まれ、子供の頃から久松山を仰いで育ったので、久松山と経家公には格別の関心と愛着を持っていた。そのため、前記の銅像建立についても、建立委員会の事務局長として、その実現に努力した。さらにまた、この平和塔についても、その建立に関わった一人である。

この平和塔が昭和三十四年四月建立されてから、すでに四十年近く経過し、その当時の経緯を知る人も次第になくなって、歴史の流れの中に消えてしまう恐れがあるので、このたび、手元にある資料と、関係した人々の思い出話をたどって、その建立の経過を記録しておくこととする。

二 雁金城の戦い

鳥取城の攻防は、秀吉の最も得意とする兵糧攻めが主であったから、激烈な戦闘は比較的少なく、次の二つが数えられる。

その一つは、湖山池畔の防己尾城の戦いである。この戦いでは、防己尾城を守る吉川方の勇将、吉岡将監の軍を、秀吉が自ら指揮して攻めたのだが、将監の作戦が実に巧妙で、秀吉軍は多くの将兵を失い、馬印の千成びょうたんを奪われるなど攻めあぐんで、結局攻撃をやめてしまってい

る。秀吉の数少ない敗戦の一つである。

もう一つが雁金山の戦いである。

吉川方は久松山の本城から、峰続きの雁金城、丸山城に砦を連ね、堅固に防衛していた。

九月末、湯所から円護持に至る道祖神タワに秀吉の特命により宮部善祥坊継潤の率いる強力な部隊が攻め上がった。現在の湯所トンネルの上の峠に、湯所と円護寺の両方から攻撃を加えて、必死に守る吉川方と熾烈な戦いが繰り広げられたが、城方は長い兵糧攻めのため飢餓に陥っていたから、気は焦っても刀が思うように振り回せない状態になっていた。

こうして城方の軍勢は総崩れとなつて、雁金城は秀吉方に奪われ、守将塩治周防守高清以下、尾根伝いに丸山城に逃げ込んだ。その結果、鳥取本城と丸山城は完全に分断されて、絶望的な状態になってしまった。これからあと一ヶ月足らずで、鳥取城の開城、経家の自刃となるのである。

三 平和塔建立の経緯

「鳥取城攻防戦における吉川方、秀吉方の多数の戦死者、ならびに渴え殺しによる餓死者の例が成佛できずに迷っている。その結果、鳥取には大火、大水、大凶作、流行病等が引きも切らず発生、特に昭和十八年九月十日の鳥取大地震では鳥取市街が全滅、死傷者五千人に及ぶ。更に昭和二十七年四月十七日に鳥取市の大半、五三〇〇戸が焼失するという記録的な災害が起こっている。何としてもこの浮かばれない霊を慰霊し、鳥取市に平和と安泰をもたらさねばならない」という考えが、鳥取市の佛教者の中に生まれた。

言い出した人は、鳥取市馬場町、本慈院住職の山根啓念師である。師は檀家の岡本鹿道氏（●●●●●、自転車商）と相談し、まず日蓮宗の寺院、続いて鳥取の佛教連盟に呼びかけ、その全面的賛同を得て、「広く過去における我が郷土先人達の精霊を慰めるとともに平和の発展を祈り、一切の災禍の絶滅を念じて記念物を作ろう」という気運が全市的に盛り上がった。そして、鳥取市役所を始めとし、鳥取商工会議所、日本海新聞社、鳥取市観光協会の四団体が中心となつて、「平和塔建立奉賛会」（会長・入江昶鳥取市長）が設立された。

前期の本慈院に唯一部残っていた「平和塔建立主意書」により、その全部を記す。

「前文（詳細別紙）

本文

平和塔建立発願人名簿

募集要項」

この趣意書の中に、恐らく古文書の中から拾い出されたであろうが、慶長八年から昭和二十七年までに鳥取で発生した災害が列記されている。この数は全部で四十一件に上がっているが、その内訳は

大火 二四件

大風、大洪水 十五件

地震 一件

凶作 一件

の多きに上り、特に火災は、江戸時代だけで一千戸以上の焼失が十一件を数えている。これでは城下町鳥取の発展はあり得ない。災害絶滅の願いには、まさに歴史に基づく切実なものがあつたのである。

また、趣意書のリストによる発願人は、国会議員、県、市の執行部、議員、主要企業の役職者、佛教会の幹部が残らず網羅されていて、正に全市をあげての悲願であつたことを証明している。

私事を少し記させて頂く。

私の母、浜田ちかは熱心な日蓮宗の信者で、前記の本慈院住職、山根啓念師と懇意にしていたから、この運動には始めから相談に乗り、一生懸命、募金の経石を知人や信者にお願ひして廻つた。私も当時中国電力に勤務していたが、職場の上司、同僚に、この経石による募金をお願ひして協力して頂いたのを覚えている。

また、奉賛会副会長で、鳥取大丸専務取締役の梶木馨氏が私の家の二階に仮住まいされていた。梶木氏は鳥取大火後間もなく、大丸本社から鳥取大丸に出向して来られたが、大火のため当時の鳥取にはまともな家がない時期であり、大学の後輩である私のところに下宿させてくれということとで、火災で焼けてからやつと建てた私の家に仮住まいされていたものである。

梶木氏は、正に総理大臣か、駐米大使にしてもいい風格の、堂々たる偉丈夫であり、米原幸三（ママ・「章三」カ）氏の信頼が極めて厚く、いろいろな面で鳥取の実業界をリードしていた。

この梶木氏に、私の母と私は、平和塔建立について何かと相談した。梶木氏は、「大丸としては、他との関係もあり、お金の面で特別なことはできないが、知恵はいくらでも出しますよ」ということで、実業界への働きかけを頑張つて頂いた。特に、「施工業者は、米原さんの顔のきく地元の業者に信頼するのが、事業成功の一番の秘訣ですよ」とアドバイスされたり、設計や姿図のプランをさらさらと描いて見せられたのが、印象に残っている。

四 建設地点について

趣意書では、「久松山の頂上に一大平和塔を建立して……」となっていて、当初はそのつもりで鳥取市に申請している。これに関して、現在鳥取市教育委員会文化課に保存されている文書によれば、次のようになっている。

昭和二十八年十月二十八日、鳥取市教育委員会から、鳥取市長宛に、次の意見書が提出されている。

「1 建立の意図は適當である。

2 久松山に建立するのは、次の理由で反対である。

(1) 現在文部省に、国の史蹟として指定して貰う意向で申請準備中である。

(2) 奉賛会が計画している場所は、重要史蹟としての意義を失わせる構造物となる。

(ふさわしくない)

(3) 景観が好ましくない。

3 望ましい場所は

(1) 経家公墓所に近い円護寺墓地公園

(2) 源太夫山の山頂

(3) 興禅寺の裏山 である。

この意見書により、久松山頂案は難しくなった。

史跡問題については

「二十九年三月、久松山の城跡を県の文化財として仮指定してほしい旨、市教委から、県教委に申請

二十九年十一月 県の仮指定が決定

国から調査に来鳥

三十二年十二月八日 国の史蹟に本指定 」

という経過をたどった。

こうして久松山頂はダメになり、これに代わる場所が検討された結果、雁金山頂が適当であるとして、これに決定した。

その理由は、

1 前述の通り、鳥取城の攻防で激戦のあった由緒の地である。

2 史蹟指定地の区域外である。

という点である。

五 設計について

建設地点が決まったので、実施設計に入った。設計は鳥取市土木部建築課で行われた。

鳥取大火後、鳥取市には火災復興局が設置され、気鋭の建築技術者が揃って、着々と学校その他の公共建築物の設計が進んでいた。

建築課長の田中穡（おさむ）氏は、多くの職員の中から、京都工芸繊維大学建築学科卒業の二十七歳の蓮佛亨氏に特命して、平和塔の設計に当たらせた。

蓮佛氏は、鳥取大火後の児童会館、学校、婦人会館等を手掛けていたが、これらの定型的な設計と違って、平和塔は全く創造的なモニュメントであるので、特に情熱を燃やし、心血を注いでこれに当たった。

当時、鳥取市は大火後の復興のため財政が逼迫し、赤字再建団体に指定されることになっていた。鳥取市の入江市長が奉賛会の会長になっていても、金を出して助成することは困難であった。そのため、鳥取市としては、人材派遣という形で助成することとし、建築課員が設計と監理に当たったのである。

奉賛会の趣意書では「設計図は目下東大教授工学博士、岸田日出刀先生（東伯町出身）のもとで製作中」となっているが、これは募金を効果的に行うためのテクニックで、実際は前述の蓮佛

氏が作ったのである。

蓮佛氏の設計思想は次の通りである。

- 1 雁金山頂に建設することについて、ランドスケープウォッチングを、千代水、円護寺、鳥取市内一円から数人がかりで行う。山頂の樹木に長い竿をくくりつけて立て、先端に赤い布をつけ、どこからもよく見え、完成した平和塔が、鳥取市民の目にはつきりと美しく見えるであろうことを確かめた。
- 2 設計は、大戦争、鳥取における大火、震災、洪水、凶作等の犠牲者の慰霊と安泰を祈願することが目的であるから、佛教を信じる人が多い日本では五重塔への愛着、親しみが強からうから、これを基礎にしようと考えた。
- 3 塔を見栄えの良いうように高さを持たせるため、五重の塔に相当する五段の上に八段を加えて、合計十三段の相輪とする。この塔を下から見上げた場合、最も美しく安定した姿になるようにするため、十三段の平板の辺をつなぐ線が、Xの自乗分の2の双曲線になるようにする。平板の感覚は等比級数とし、上に行くほど感覚が縮まるようにする。
- 4 一段目の基盤の下に、お経の一字と、募金拠出者の名前を書いた経石を入れる。
- 5 基礎は八方向に地中梁を設けて固める。
- 6 塔の先端に避雷針を取り付ける。

六 工事管理について

以上の設計図が完成した昭和三十三年三月、設計者蓮佛氏は市役所を退職し、建築家の仲間たちと共に設立した京都建築事務所で、京都の諸建築、都市計画に携わった。

これを引き継いで、建築課員の中村喜夫氏が以後の平和塔の施工監理を担当した。

以後の工事経過は以下の通りである。(中村氏のメモによる)

昭和三十三年三月二十九日 平和塔を含む予算が市議会で可決

同 四月二十五日 設計図完成

同 五月十五日 建築確認申請

同 五月十七日 現場説明 (五業者 大内建設、山本工業、藤原組、太平土建、同利建設)

同 五月十九日 入札執行。山本工業 (現やまこう建設) が落札

同 五月二十八日 天徳寺で、起工式及び地鎮祭

同 六月二日 現場着工

同 六月九日 鳥取営林署から「塔の直下から索道を通して資材を運ぶ経過地に保安林があり、その樹木を伐るのは困る」との異議申し立てがあり、設計変更を検討することとして、工事中止 (約五カ月間)

同 十一月十七日 工事再開

同 十二月十六日 避雷針接地抵抗試験

同 十二月十七日 基礎コンクリート打設

昭和三十四年一月十七日 九輪宝珠について研究のため、倉吉の長谷寺を視察
 同 二月十三日 祈念石調査
 同 三月末頃 躯体工事完了
 同 四月十三日 九輪、避雷針など設置完了
 同 四月末 完成引き渡し

七 平和塔の規模概要

敷壇 鉄筋コンクリート造
 間口 一五メートル
 奥行 九メートル
 面積 一三五平方メートル
 塔 鉄筋コンクリート造
 全高 一六・九〇メートル
 塔屋 一層（二・〇メートル）、
 相輪十三段（二二・〇四メートル）、九輪（二・八六メートル）
 避雷針付き
 表面 リシン仕上げ

基礎の下に、お経の一字と募金協力者の名前を記した経石（那智石）を埋め込む。

塔屋壁面及び塔身最下部面に、鳥取市が全国の各都市に呼びかけて寄進していただいた各市の産石のプレートに、各市の市名と市長名を彫り込んだ記念石一五九個をはめこんである。

この工事は、索道により急傾斜の雁金山に、大量の鉄材、コンクリート等を運び上げ、厳冬の十二月から四月までの悪コンディションの中で行われた。

また、配筋やコンクリートの流し込みにしても、通常の工法より難易度が高く、監理の中村氏や、施工の山本工業の苦労は並大抵でなかったと察せられる。

八 建設資金について

建設資金は、趣意書による募金により賄われている。この募金活動は昭和二十九年二月から始まっている。拠出者の明細と募金額については、芳名録が残っていないので詳細はわからないが、建立の総費用は二五〇万円である。

募金により集まった浄財は鳥取市に寄付歳納され、鳥取市から指名入札の結果、山本工業に発注されたものである。

九 おわりに

こうして建立された平和塔は、二基の照明によってライトアップされ、鳥取市観光課の担当により、四十年近く経った現在に至るまで、鳥取市民に平和塔を照らし出している。この維持管理の努力は大変なもので、誠に有難いことである。

竣工後しばらく経って、日本海新聞に、平和塔の袋川畔にある鳥取鑑別所に收容されている少年が、夜空に輝くこの平和塔を見て、離れている父母を懐かしんで涙を流し、まじめになったという記事が掲載されたという。平和と心の安らぎを願う塔の理念は、おのずから人の心により影響を与えるのである。

この平和塔が建立されてから、鳥取市には目立った災害はない。日本全体の情勢もあろうが、市勢は隆々として発展し、商工業は順調に伸び、市民は安穩に生活を楽しんでいる。

多くの犠牲者の霊を供養し慰めたお陰という因縁話は古いかもしれないが、実際にはその通りの結果になっている。

市民の平和と安泰を願っての平和塔の建立は、見事にその目的を達成したのである。

鳥取市の歴史を物語るこの平和塔を、鳥取市民は、もつともつと自分のものとして眺め、足を運んでもらいたい。さらにその悲壮な由来を、よその人にも伝えていただきたいと切望するものである。



①

平和塔建立趣意書

主権 平和塔建立奉讃會
後援 鳥取市 鳥取商工奉讃會
鳥取市 日本海新聞社
鳥取市 觀光協會
本所 鳥取市上島町三番一
電話 二〇九三

謹啓 嚴冬の砌り各位には益々御清適のことゝ慶賀の至りに存じます

擬今回別紙趣意書の通り我等同志相圖り鳥取市の名蹟久松山の一角に平和塔の建立を發願し廣く過去に於ける我が郷土先人達の精進を慰めると共に平和の發展を祈り一切の災禍滅除を念じ住みよい郷土建設のために全市全縣民共に心を結ぶの資といたしたく殊に日本の獨立と未曾有の鳥取大火を復興記念して新しく前進するに相應しき好機と考えますので茲に奉讃會を設立いたしました次第であります
就きましては時下御多忙の折柄恐縮の至りに存じますが廣く各位の御協賛を御願いたしますと共に本事業遂成のため御協力賜りますよう切に懇願する次第であります

昭和二十九年二月 日

敬 白

平和塔建立奉讃會會長

鳥取市長 入 江

殿



平和塔建立趣意書

今より平和をねがう時代はない。むしろ國內戰國の時代でも民衆は常に平和をのぞんだにちがいないが、第二次大戰後の平和思想は強烈で、且つ理性的で戰爭そのものに反對する意義をもち、戰爭を無くしようとしている。そして部分的でなく全般的に、「世界中の民衆の心をとりあてている、人類の進歩といわねばならない」。

昭和二十七年四月十七日、鳥取市の一角に起つた紅れんの炎は折柄の烈風にあおられて一大業火となり、燃えつゞく事十數時間、遂に鳥取の大半を灰燼と化した。（世界第四位）過ぐる昭和十八年九月十日の大震災（世界第二位）にあい、それから十年營々として郷土の建設を志した。その瘡い未だ癒る間なく、この慘事を見る。誠に悲惨と言わなければならぬ。これはもとより地方的な天變地異の不幸であり、いわゆる平和思想をねがう心を促すものとはいえないが、しかし我々の念願からいえば同じくそれらの災禍も合せてのがれねばならない。すなわち我々は自分達の故郷、美しい鳥取にこのような不祥事が絶えず起り、骨肉相食むがごとき不幸の再度起らないことを念願して止まない。

ここにおいて我々は同憂相圖つて久松山の一角に大鳥取鎮護祈願のために大平和塔建立を發願した。けだし鳥取が因幡と呼ばれた古い昔から久松山を中心として絶間のない闘争が繰り返

擴げられた。就中、吉川經家が羽柴秀吉に攻められて遂に無條件降伏にひとしく落城自刃の悲運にあつたことは今なお太閤記に傳える如く戰爭の悲惨を物語り、その代表的なものと言わなければならぬ。

この悲惨な戰國に依りて傷き倒れた古武士のしかばねは久松山を紅く染め累々として轉つたと云う。しかもこれら不遇な無名の戰士の慰靈の道は購ぜられたことを聽かない。あるいは

- | | | |
|---------|-----------|--------------------------------|
| 慶長八年 | 二百戸の大火 | 魚町より出火、魚町、京町、與右エ門町、鯉町、青嶋町焼らず損失 |
| 万治三年十二月 | 大火 | 下台町、材木町 |
| 寛文二年四月 | 大火 | 右時刻苑町七十五ヶ放火 |
| 元祿二年七月 | 大火 | 江崎町より出火 |
| 八年七月、九月 | 大風 大因作 | |
| 十四年 | 大洪水 | |
| 十五年七月 | 大洪水 | |
| 十六年八月 | 大雨洪水 | |
| 寛永四年八月 | 大洪水 | |
| 正徳元年九月 | 一、一、二四戸大火 | 真教寺より出火一八ヶ町村 |
| 二年三月 | 一、一〇〇三戸大火 | 二階町熊鷹治兵衛より出火 |
| 三年七月 | 大風 | |
| 享保元年 | 大火 | |
| 五年四月 | 二、一五〇戸大火 | 石黒三太兵衛より出火、久松本丸山手町七ヶ町 |

とつねに大凶作大旱ばつ。それに續いて流行病など續出し、永い歴史のわずかの間にこれだけの天變をうけてゐる。

時は移り歳は變り久松山は青葉に紅葉に春秋美しく、鳥取は文化都市として近代化してゆけれども、大地震、火災と天變はいさゝかも衰えを見せない。大産業、大事業、盛大な催しもあらゆる機關の努力にかゝらず遅々として進まないのが現状である。あたかもこの未曽有の大火が日本が敗れて七年間占領下であり、ようやく獨立を宣言する年月に起きた。過去を忘れて現在を見て、あれこれ連想する時、吾々は此處に一大因縁の地相を思い、佛魔一紙のことわりある所以を感ぜられてなりません。依て久松山の頂上に一大平和塔を建立して大鳥取の行くべき平和の發展をいのり、除災固満を念じ、鳥取縣民ならびに市民と共に心を一つにしたいと思います。

切に縣民、市民各位の御協賛御支援を懇願致します。

東大教授工學博士 岸田日出刀先生
(東伯郡出身)

の
も
と
で
製
作
中

[illegible][illegible]